

善い時間



© Yuki Nakase

Circle Sky

言葉というのは本当に難しい。特に照明デザインを言葉でもって理解しあうのは、もしかしたら不可能に近いのかもしれませんが。演出家からよく聞く言葉は「暗い」「明るい」に始まり「美しい」「シンプル」「ミステリアス」「スタイリッシュ」などさまざま、どの言葉をとっても数千の解釈が存在します。作品と演出によって唯一無二の答えが生み出されるわけですが、それは照明デザイナーの独断で決定されるわけではなく、演出家、出演者、他部署デザイナーとの密なコラボレーションによってのみ創造されます。照明デザイナーにとっても照明のプロでない人に光を言葉で説明するのが簡単ではないように、演出家にとって求める光を照明家に伝えるのは一苦勞でしょう。

2015年がどんな時間だったか振り返りながら、多種多様な演出家との出会いとコラボレーションを思い出しています。今年は演劇と舞踊10作品の照明デザインと2作品の美術デザインを務め、4名の巨匠照明デザイナーのアシスタントとして10作品に携わりました。初めに話し合ったデザインの軸を突き通す人、話し合った時間が何だったのか疑問に思わせるほどに現場ですべてを変える人、何がしたいのか決められない人、何がしたいのかわかっているけど伝えられない人などさまざまです。照明家としてそのような人々と接し、断片的な言葉の数々から求められているものをなんとなく理解し、それを現場に持ち寄って演出家と一緒に組み立てていくのが照明デザインと定義していますが、それが一筋縄でいかないのがこの職業の魅力なのかもしれません。

アメリカに拠点を置く演出家と仕事をしていて有

難く思うことの1つは、彼らが照明デザイナーに色の指定をしない点です。「このシーンは赤にして」というような要望を聞いたことがありません。それよりも、「色の与える影響」を求めてきます。また、彼らが一瞬の画よりもどのように光が移り変わり、舞台上に生きる時間を観客と如何に共有するかということに重点を置いている点にも共感します。その作業は時間が過去から未来へどの場所でも常に等しく進むものである「絶対空間」である現実を覆す自由を手に入れた結末のようです。ただし、そういった要望や提案は言葉にして分かり合うことが非常に難しく、現場で一緒に答えを探る以外に方法がないように思います。十分な資金の元で1カ月以上も劇場で共同制作に打ち込めるような環境でない限り、大抵の現場は時間に追われ、照明デザインを「ああでもないこうでもない」と実地調査することは不可能に近く、言葉によるやり取りに多くを頼るほかないのが現状です。

「2015年も良い年でした」と言う私も、「良い」の解釈が曖昧なことをわかりつつ、いまそのように書いています。はらわたが煮えくり返るような仕事もあつたはずですが、良い思い出しか記憶に残っていないことに感謝します。人が人をわかることはできないけれど、わかろうとすることを諦めないと、結果はどうであれ善い時間になると思います。一年にも人生にも太陽にも月にもいつか終わりが来て、その時に「言葉にできないけど、なんか良い時間だった」と思えたら幸いです。今年一年、ニューヨークエッセイを掲載していただきましたことをここに御礼申し上げます。皆様、良いお年をお迎えください。